Mutagens (2009.8)

Honma, M., Yamakage, K., Burlingson, B., Escobar, P., Pant, K., Kraynak, A., Hayashi, M., Nakajima, M., Suzuki, M., Corvi, R., Uno, Y., Schechtman, L., Tice, R., and Kojima, H.: Unternational validation study of the in vitro alkaline Comet assay.
10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Hirose, A., Kamata, T., Yamazaki, T., Sato, K., Yamada, M., Ono, A., Fukumoto, T., Okamura, H., Mirokuji, Y., and Honma, M.: Validation of the (Q)SAR combination approach for mutagenicity prediction of flavour chemicals.
10th International Conference on Environmental Mutagens (2009.8)

Honma, M.: The new ICH guidance on genotoxicity
International Conference on Environment, Occupational & Lifestyle Concern-Transdisciplinary Approach (2009.9)

鈴木孝昌、小原有弘、小木美恵子、田邊思帆里、本間正充；8 番染色体特異的 CGH アレイ解析による各種がん細胞株での c-myc 遺伝子増幅形式の解析
第 68 回日本癌学会学術総会(200.10)

Honma M, Takashima Y, Sakuraba M, Koizumi T, Sakamoto H, and Hayashi M: DNA double strand break repair pathways and its dependence on cell cycle phases in human lymphoblastoid cells.
Environmental Mutagen society 40th Annual Meeting (2009.10)

本間正充； In vitro 遺伝毒性試験における最高用量と細胞毒性の評価
日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

真田尚和、櫻田直美、米澤豊、入山昌美、本間正充；コルヒチン及び、ビンブラスチンのラット末梢血を用いた小核試験
日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

小山直己、木村葵、安井学、高見成昭、高橋美和、井上薫、吉田緑、今井俊夫、渋谷淳、鈴木拓也、増村健一、堀端克良、増田修一、木苗直秀、松田知成、能美健彦、本間正充；ライフステージ（週齢）を考慮したアクリルアミドの多臓器遺伝毒性評価
日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

安井学、小山直己、高島良生、林真、杉本憲治、本間正充；共焦点ライブセルイメージングによって明らかとなった小核のライフサイクル
日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

鈴木孝昌、小原有弘、ラマダンアリ、菊池裕、本間正充、林真；バルカン腎症の原因物質としてのアリストロキア酸およびオクラトキシン A
日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

谷田貝文夫、高橋昭久、本間正充、鈴木ひろみ、大森克徳、関真也、橋爪藤子、鵜飼明子、島津徹、榎本秀一、堂前直、大西武雄、石岡憲昭；国際宇宙ステーション利用実験：ヒト培養細胞の突然変異解析から宇宙環境の生物影響を解明する試み
日本環境変異原学会第 38 回大会(2009.11)

山本歩、本間正充；Unconectable I-SceI サイトの挿入による放射線損傷様二本鎖 DNA 切断の修復機構の解析

日本放射線影響学会第52回大会(2009.11)

安井学、本間正充；8-オキソグアニン1分子のゲノム内における突然変異誘発能の解析系の確立；低線量電離放射線の暴露モデルとして
日本放射線影響学会第52回大会(2009.11)

本間正充、山影康次、Burlingson, B., Escobar, P., Pant, K., Kraynak, A., 林真、中嶋まどか、鈴木雅也、Corvi, R., 宇野芳文、Schechtman, L., Tice, R., 小島肇；In vitro アルカリコメットアッセイ国際バリデーション研究
第22回日本動物実験代替法学会総会(2009.11)

Honma, M. The new paradigm of genotoxicity testing in regulatory science –ICH guideline and IWGT consensus- The 1st International Symposium on the Drug Safety Evaluation (2009.12)

H. 知的所有権の取得状況

なし

平成21年度 厚生労働科学研究費補助金(食品の安心・安全確保推進研究事業)
分担研究報告書

研究課題名:食品添加物等における遺伝毒性発がん物質の評価法に関する研究

分担研究課題名:国際的な「遺伝毒性物質の閾値」に関する情報収集

分担研究者:長尾 美奈子 慶応義塾大学薬学部客員教授

研究要旨

In vitro において遺伝毒性発現に閾値を示さない発がん物質の発がん性については、発がん標的臓器によって閾値の有無は異なることが示されている。一方遺伝毒性に閾値を示す物質の存在も示されていることから、遺伝毒性で閾値を示す物質は、発がん性においては標的臓器の如何を問わず閾値を示すことが想定される。すなわち遺伝毒性において閾値を示す物質を明確に把握することが重要である。 Hoffmann-La Roche から発売された Viracept (HIV のプロテアーゼ阻害剤)に、遺伝毒性発がん物質 Ethyl methanesulfonate (EMS) が混入していることが判明した。EMS は種々の *in vitro* 遺伝毒性試験で閾値の存在が示されていた。*In vitro* で遺伝毒性に閾値を示さない ethyl nitrosourea (ENU)を対照に用いて、種々の臓器における *in vivo* 遺伝毒性に閾値が存在するかを検討した。Comet assay, micronucleus test, *Lac Z* 変異で検討した結果、いずれのテスト系でも、また、テストしたいずれの臓器でも閾値の存在が示された。発がんにおいても閾値の存在が強く示唆された。EMS のマウスおよびヒトにおける体内動態に検討を加え、ヒトにおける Viracept からの EMS 実質暴露量が遺伝毒性閾値以下であること示した一連の論文を紹介する。わが国の遺伝毒性発がん物質の取り扱いに参考となる事例と考える。

キーワード:EMS, 遺伝毒性閾値、ヒト暴露、リスク評価

A. 研究目的

遺伝毒性発がん物質の遺伝毒性における閾値の評価法に関する国際的な動向を調べる目的で文献検索を行なった。本年度は、DNA に直接作用するが、DNA 修復に基づく閾値の存在が示されているアルキル化剤の医薬品への混入が欧州製薬会社製品で生じた。その混入に対するリスク評価が当該製薬会社で行われた。この評価方法は閾値のある遺伝毒性発がん物質の取り扱いに参考となる事例であるので詳細に紹介する。

２００７年３～５月に Hoffmann-La Roche により、米国、カナダ、日本以外で販売された HIV 治療薬「Viracept」に、遺

伝毒性、催奇性、発がん性のあることが知られているエチルメタンスルホン酸（EMS）が混入した。この事故はメタンスルホン酸の貯蔵タンクをエタノール洗浄した際、その除去が十分行われなかったことに起因している。この製品中の EMS 濃度は 1000 ppm に達した。HIV 患者の EMS 最大摂取量は 0.055 mg/kg day、3ヶ月間の合計摂取量は 5.2 mg/kg と算出されている。Hoffmann-La Roche により行われたこの EMS 混入のリスク評価を以下に示す。

B. 研究方法

文献検索により情報を収集した。

（倫理面への配慮）

本研究では該当するものはない。

C. 研究結果

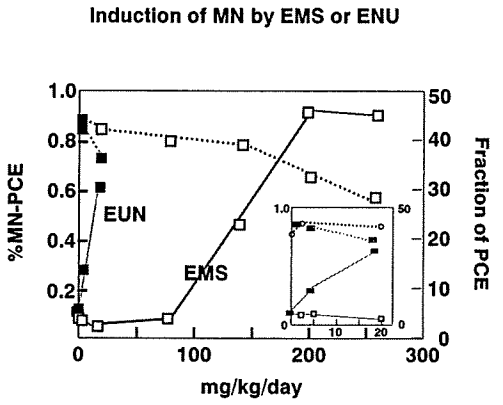
1. 遺伝毒性

a) In vitro における遺伝毒性

平成19年度の厚生労働省食品の安心・安全確保推進研究事業「食品添加物等における遺伝毒性評価のための戦略構築に関する研究」に報告したとおり、ヒトリンパ芽球細胞を用いて、EMS は小核誘発、HPRT 遺伝子変異誘発において閾値が存在することが報告されている。閾値は夫々1.35 μg/ mL および 1.25 μg/mL であった。Hoffman-La Roche では以下の in vivo 実験を行い閾値の存在を確認した。

b) In vivo における遺伝毒性

マウスに EMS を7日間投与（0, 1.25, 2.5, 5.0, 20, 80, 140, 200, 260 mg/kg/day）における骨髄小核誘発試験の結果、EMS では明らかな閾値の存在が示された。その値は 89. 8 mg/kg であった。 一方 ENU では閾値は認められなかった。図-1に結果を示す。



図—1 EMS および ENU による骨髄小核誘発

Muta™ マウスにおける LacZ 変異で閾値の有無を検討している。EMS（0, 1.56, 3.13, 6.2 5, 25, 50, 100 mg/kg day）を28日間投与し、31日目に骨髄、肝臓、消化管における突然変異率を調べた。いずれの臓器でも閾値が認められ夫々35.4, 51.3 および24.5 mg/kg day であった。一方 ENU はいずれの臓器でも閾値は認められなかった。

2. 閾値の算出

上記 EMS の種々の遺伝毒性検出系における閾値の算出には Lutz and Lutz（2009）の Hockey Stick software （www.r-project.org よりダウンロードできる）を用いて統計的に求めている。このモデルに合う用量相関は2本の直線で表される。

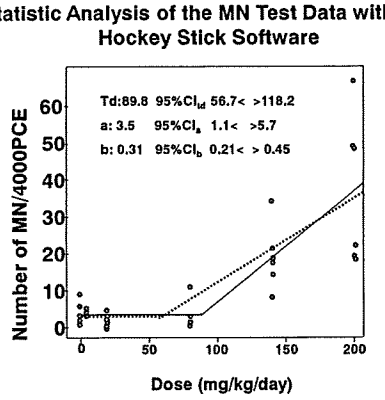
$y = a + b\,(d-td)$

y: 遺伝毒性

a: 遺伝毒性マーカーの背景レベル

b: 直線の勾配

td の用量までは y = a の勾配（b）が0の直線ではじまり、用量 td 以上では 勾配 b の直線に合う線形の得られるものである。EMS の MN テストの結果を Hockey Stick で表すと図－2のようになる。



表－1に示すのはこのモデルに従って算出した種々の遺伝毒性試験における閾値である。

表-1 EMS の種々の遺伝毒性テストにおける閾値

テスト	臓器	閾値 td (mg/kg/day)	95% CI (mg/kg/day)
MN	骨髄	89.8	56.7 - 118.2
LacZ	骨髄	35.4	21.5 - 45.7
LacZ	肝臓	51.3	25.7 - 100.0
LacZ	消化管	24.5	13.0 - 38.5

以上の結果からマウス・遺伝毒性から見た閾値は 25 mg/kg day であることがわかった。

3. リスク評価

a) 従来の方法による、用量相関が直線であると仮定しての評価

EMS には遺伝毒性、発がん性および催奇性以外の毒性に関する報告はない。

EMS の終生投与実験の報告はないので同じアルキル化剤メチルメタンスルホン酸をマウスに飲水投与したときの肺腫瘍誘発率を用いて発がん率を推定し場合 0.0031%となる。AIDS 患者では発がん感受性は約3倍であるという報告に基づく補正を行うと 0.009%になる。さらにヒトにおける AUC（下記参照）はマウスの12倍であることに基づく補正を行うと 0.11%になる。数千人の AIDS 患者が摂取したので数人が犠牲になることになる。

ラットに EMS（3-20 mM）を 0.5-3 ヶ月飲水投与したで乳がん誘発実験からの外挿では、ヒトにおけるリスクは 0.12%となる。AUC および感受性の増加の補正を行うと%の桁数で発がんを誘発したことになる。

催奇性に関するマウスのデータの外挿からは、AUC の補正なしで 0.15%の増加が推定された。BG のヒト奇形発生率は 2.68%である。AUC の補正を行うと 1.5%となり影響はかなり大きくなる。

b) 遺伝毒性における閾値存在に基づく評価

遺伝毒性物質で閾値のある EMS とない ENU のリスク評価での重要な差異は、EMS は閾値以下の低濃度に分割投与した場合には遺伝毒性は認められないが、ENU の場合は加算されることである。従ってマウスに EMS を28日間投与で得られた閾値は、より長期の投与でも変わらないことが考えられる。

EMS のリスク評価を行うにあたり先ず、暴露量で直接比較した。

1）Viracept 中の EMS は 1068ppm で、Viracept 摂取期間中のヒトの暴露量は最大で 0.055mg/kg day（体重60kg）であった。マウス in vivo における遺伝毒性閾値は 25 mg/kg/day である。これらの値から安全係数を計算すると 454 になる。

2）実験動物およびヒトにおける薬物動態を考慮した暴露評価を検討した。EMS は肝臓ミクロソームやグルタチオン転移酵素による分解は殆ど受けず、主として化学的加水分解によりエタノールとメタンスルホン酸に分解される。緩衝液、血漿、腸管液中の半減期は37℃で12時間である。経口投与した EMS は63－73%が消化管から速やかに吸収され10分後に最

高血漿濃度に達する。

^{14}C－EMS 投与実験より得られた in vivo における半減期は、マウスで 10 - 24 分、ラットおよびサル(cynomolgus)で 2.5 - 5 時間であった。そこで以下の仮定を適用した。

1. AUC は可能な限り高い値とし、排泄除去(clearance)は in vitro の緩衝液中での化学分解値を用いた。
2. マウスでは EMS の低用量では排泄除去は増加していたが、ヒトでは低用量でも増加しないとした。
3. ヒトでの吸収は速やかで100%であると仮定した。
4. EMS 体内分布の容量(distribution volume)は動物種によらず一定で0. 521 L/kg とした。

ヒトでの半減期は 10.7 h と算出された。

マウスに EMS を経口投与し得られた血中濃度－時間曲線を用いて測定したマウスにおける遺伝毒性閾値(25mg/kg)の C_{maxThd} は 315μM であった。C_{max} は排泄除去の影響は殆ど受けず、また、EMS の場合は動物種によって分布容量(distribution volume)が変わらないので、動物種が異なっても用量にのみ依存するとした。その結果、Viracept を摂取したヒトの AUC は 13μMh, C_{max} は 0.85 μM と算出された。

表-2 Viracep を摂取したヒトと閾値 EMS を投与したマウスにおける EMS の体内動態の比較

マウス		ヒト	
実測半減期	10-24 min	推定半減期	10.7 h
Thd	25mg/kg/day	Max dose	0.055 mg/kg/day
C_{maxThd}	315 μM	C_{max}	0.85 μM
AUC_{Thd}	350 μMh	AUC_{max}	13 μMh

C_{max} からの安全係数は 370 と算出された。

実質暴露量(AUC)から算出した安全係数は27であった。

D. 考 察

以上に示したように Viracept に混入していた EMS は、閾値のない LNT(Linear Non-threshold)モデルでは、マウスとヒトの代謝の違いを考慮するとかなりのリスクを伴うものであると算定される。しかし、遺伝毒性における閾値を考慮した場合は、ヒトにおける EMS の吸収、代謝をより安全側に仮定してのリスク評価で、安全であると算定された。これは事故による事例であるが、遺伝毒性発がん物質の取り扱いが現状のままで良いかを、再検討するには有用な事例であると考える。

E. 結論

化学物質の有効利用を考える上で、遺伝毒性発がん物質で閾値を有するものの情報を収集する必要がある。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 引用文献

1. M. Kirsch-Volders, L Gonzales, P Carmichael, D Kirklan. Risk assessment of genotoxic mutagens with thresholds: A brief introduction. Mutat Res. 2009: 678: 72-5.
2. E. Gocke, L Muller. In vivo studies in the mouse to define a threshold for genotoxicity of EMS and ENU. Mutat Res. 2009: 678; 101-7.
3. WK Lutz, RW Lutz. Statistical model to estimate a threshold dose and its confidence limits for the analysis of sublinear dose-response relationships, exemplified for mutagenicity data. Mutat Res 2009: 678: 118-2.
4. GE Johnson, AH Doak, AM Griffiths, EL Quick, DOF Skibinski, ZM Zair, GJ Jenkins.

Non-linear dose-response of DNA- reactive genotoxins: Recommendations for data analysis. Mutat Res. 2009: 678; 95-100.

5. E Gocke, M Ballantyne, J Whitwell, L Muller. MNT and Muta™ Mouse studies to define the *in vivo* dose response relations of genotoxicity of EMS and ENU. Toxcol LettToxicol Lett. 2009: 190; 286-97..
6. E Gocke, L Muller, T Pfister. EMS in Viracept-Initial (traditional) assessment of risk to patients based on linear dose response relations. Toxcol Lett. 2009: 190; 266-70.
7. L Muller, E Gocke, T Lave, T Pfister. EMS toxicity in Viracept- A comprehensive human risk assessment based on threshold data for genotoxicity. 2009: 190; 317-29.
8. T Lave, A Paehler, HP Grimm,E Gocke, L Muller. Modelling of patient EMS exposure: Translating pharmacokinetics of EMS in vitro and in animals into patients. Toxicol Lett 2009: 190; 310-316.
9. T Lave, H Birnbock, A Gotschi, T Ramp, A Pahler. In vivo and in vitro characterization of ethyl methansulfonate pharmacokinetics in animals and in humans. Toxicl Lett. 2009: 190; 33030-309.

H. 研究発表

1. 論文発表

Inami K, Nagao M, Ishikawa S, Mochizuki M. Mutagenicity of heterocyclic amines by chemical models for cytochrome P450 inb the Ames assay. Gene Environ. 2010: 32: in press.

2. 学会発表

なし

G. 知的所有権の取得状況

なし

別紙４

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
A.H. Hashimoto, K. Amanuma, K. Masumura, T. Nohmi and Y.Aoki	in vivo mutagenesis caused by diesel exhaust in the testis of *gpt* delta transgenic mice	Genes Environ.	31	1-8	2009
Y. Aoki., A.H. Hashimoto, K. Amanuma and M. Matsumoto	Potency of air pollutants at DNA adduct formation and assessment by in vivo mutagenesis.	DNA adduct formation, detection and mutagenesisv		143-153	2010
K. Komori, T. Takagi, M. Sanada, T-H. Lim, Y. Nakatsu, T. Tsuzuki, M. Sekiguchi and M. Hidaka, A	MAPO1, that functions in apoptosis triggered by O6-methylguanine mispair in DNA	Oncogene	28	1142-1150	2009
RS. Galhardo, R. Do, M. Yamada, EC. Friedberg, PJ. Hastings, T. Nohmi and SM. Rosenberg	DinB upregulation is the sole of the SOS response in stress-induced mutagenesis in Escherichia coli	Genetics	182	55-68	2009
N. Niimi, A. Sassa, A. Katafuchi, P. Gruz, H. Fujimoto, RR. Bonala, F. Johnson, T. Ohta and T. Nohmi,	The steric gate amino acid tyrosine 112 is required for efficient mismatched-primer extension by human DNA polymerase kappa	Biochemistry	48	4239-4246	2009
A. Shibata, D. Maeda, H. Ogino, M. Tsutsumi, T. Nohmi, H. Nakagama, T. Sugimura, H. Teraoka and M. Masutani	Role of Parp-1 in suppressing spontaneous deletion mutation in the liver and brain of mice atadolescence and advanced age	Mutat. Res.	664	20–27	2009
DA. Eastmond, A. Hartwig, D. Anderson, WA. Anwar, MC. Cimino, I. Dobrev, GR. Douglas, T. Nohmi, DH. Phillips and C. Vickers	Mutagenicity testing for chemical risk assessment: update of the WHO/IPCS Harmonized Scheme,	Mutagenesis	24	341-349	2009

AM. Salem, T. Nakao, M. Takuwa, N. Matoba, T. Tsuboi, H. Terato, K. Yamamoto, M. Yamada, T. Nohmi and H. Ide	Genetic analysis of repair and damage tolerance mechanisms for DNA-protein cross-links in Escherichia coli	J. Bacteriol.	191	5657-5668	2009
H. Fukuda, T. Takamura-Enya, Y. Masuda, T. Nohmi, C. Seki, K. Kamiya, T. Sugimura, C. Masutani, F. Hanaoka and H. Nakagama	Translesional DNA synthesis through a C8-guanyl adduct of 2-amino-1-methyl-6-phenylimidazo[4,5-b]pyridine (PhIP) in vitro: REV1 inserts dC opposite the lesion, and DNA polymerase kappa potentially catalyzes extension reaction from the 3'-dC terminus	J. Biol. Chem..	284	25585-25592	2009
Y. Totsuka, T. Higuchi, T. Imai, A. Nishikawa, T. Nohmi, T. Kato, S. Masuda, N. Kinae, K. Hiyoshi, S. Ogo, M. Kawanishi, T. Yagi, T. Ichinose, N. Fukumori, M. Watanabe, T. Sugimura and K. Wakabayashi	Genotoxicity of nano/microparticles in in vitro micronuclei, in vivo comet and mutation assay systems	PartFibre. Toxicol.	6	23-33	2009
A. Katafuchi, A. Sassa, N. Niimi, P. Gruz, H. Fujimoto, C. Masutani, F. Hanaoka, T. Ohta and T. Nohmi	Critical amino acids in human DNA polymerases {eta} and {kappa} involved in erroneous incorporation of oxidized nucleotides	Nucleic. Acids. Res.	38	859-867	2010
N. Toyoda-Hokaiwado, T. Inoue, K. Masumura, H. Hayashi, Y. Kawamura, Y. Kurata, M. Takamune, M. Yamada, H. Sanada, T. Umemura, A. Nishikawa and T. Nohmi	Integration of in vivo genotoxicity and short-term carcinogenicity assays using F344 gpt delta transgenic rats: in vivo mutagenicity of 2,4-diaminotoluene and 2,6-diaminotoluene structural isomers	Toxicol. Sci.	114	71-78	2010
N. Okudaira, Y. Uehara, K. Fujiwara, N. Kagawa, A. Ootsuyama, T. Norimura, K. Saeki, T. Nohmi, K. Masumura, T. Matsumoto, Y. Oghiso, K. Tanaka, K. Ichinohe, S. Nakamura, S. Tanaka and T.Ono	Radiation dose-rate effect on mutation induction in spleen and liver of gpt delta mice	Radiat. Res..	173	138-147	2010

M. Yamada, K. Matui, A. Katafuchi, M. Takamune and T. Nohmi	Development of tester strains deficient in Nth/Nei DNA glycosylases to selectively detect the mutagenicity of oxidized DNA pyrimidines	Genes and Environ.	31	69-79	2009
T. Oyama, H. Nagayoshi, T. Matsuda, M. Oka, T. Isse, H.S. Yu, P.T.T. Phuong, M. Tanaka, N. Kagawa, K. Kaneko and T. Kawamoto, T.	N2-ethylidene-2'-deoxyguanosine DNA adducts in organs of Aldh2 knockout mice treated with acetaldehyde inhalation s	Frontiers in Bioscience		In press	2010
K. Kawai, P.H. Chou, T. Matsuda, M. Inoue, K. Aaltonen, K. Savela, Y. Takahashi, H. Nakamura, T. Kimura, T. Watanabe, R. Sawa, K. Dobashi, Y.S. Li, and H. Kasai	DNA Modifications by the omega-3 Lipid Peroxidation-Derived Mutagen 4-Oxo-2-hexenal in Vitro and Their Analysis in Mouse and Human DNA	Chem Res Toxicol.		In press	2010
松田, 永吉, 椙村, 周	液体クロマトグラフィータンデム質量分析法を用いた DNA 損傷研究法	. J. Mass Spectrom. Soc. Jpn.	57	301-304	2009
松田, 足立, 周	アダクトミクス-DNA およびタンパク質付加体の網羅的解析	実験医学増刊	27	2481-2488	2009
Y. Takashima, M. Sakuraba, T. Koizumi, H. Sakamoto, M. Hayashi and M. Honma,	Dependence of DNA double strand break repair pathways on cell cycle phase in human lymphoblastoid cells	Environ Mol Mutagen.	50	815-822	2009
J. Wang, J.R. Sawyer, L. Chen, T. Chen, M. Honma, N. Mei and M.M. Moore	The mouse lymphoma assay detects recombination, deletion, and aneuploidy	Toxicol Sci.	109	96-105	2009
F. Yatagai, K. Sugasawa, S. Enomoto, and M. Honma	An approach to estimation from DSB Repair Efficiency.	J. Radiat. Res.	50	407-413	2009
N. Koyama,, M. Yasui1, Y. Oda, S. Suzuki, T. Satoh, T. Suzuki, T. Matsuda, S. Masuda, N. Kinae and M. Honma	Genotoxicity of acrylamide in vitro: Acrylamide is not metabolically activated in standard in vitro systems	Environ Mol Mutagen		In press	2010

K. Inami, M. Nagao, S. Ishikawa and M. Mochizuki	Mutagenicity of heterocyclic amines by chemical models for cytochrome P450 inb the Ames assay.	Gene Environ	32	In press	2010

Genes and Environment, Vol. 31, No. 1 pp. 1-8 (2009)

Regular article

In Vivo Mutagenesis Caused by Diesel Exhaust in the Testis of *gpt* delta Transgenic Mice

Akiko H. Hashimoto[1], Kimiko Amanuma[1], Kenichi Masumura[2], Takehiko Nohmi[2] and Yasunobu Aoki[1,3]

[1]Research Center for Environmental Risk, National Institute for Environmental Studies, Ibaraki, Japan
[2]Division of Genetics and Mutagenesis, National Institute of Health Sciences, Tokyo, Japan

(Received June 30, 2008; Revised August 11, 2008; Accepted August 20, 2008)

Diesel exhaust (DE) is a major airborne pollutant in urban areas. In this study, we estimated the systemic effect of diesel exhaust inhalation by investigating mutations in extraplumonary organs such as the testis and liver. *gpt* delta Transgenic mice carrying the guanine phosphoribosyltransferase (*gpt*) transgene for the detection of mutations in genomic DNA were exposed to inhalation of 3 mg m^{-3} diesel exhaust (as suspended particulate matter) for 12 or 24 weeks. Compared to the control mice, DE resulted in a 2.0-fold increase in mutant frequency in the testis of mice that were exposed to DE for 24 weeks (inhaled group, 1.17×10^{-5}; control group, 0.57×10^{-5}), but not in the testis of mice exposed for 12 weeks (0.61×10^{-5}). The mutant frequency in the lungs was 2.6-fold higher in mice exposed to DE for 24 weeks than the control group, but it was not elevated in the liver (0.67×10^{-5}). In the testis, the major mutations on the *gpt* gene were G:C→T:A transversions, 1 base deletions and G:C→A:T transitions, while the major mutation in the lung was G:C→A:T transitions. The mutations on nucleotide nos. 402, 406, 409 and 416-418 in the *gpt* gene in testis seemed to be characteristic of DE inhalation in the testis. Our results suggest that inhalation of diesel exhaust is genotoxic to the testis as well as respiratory organs.

Key words: diesel exhaust emission, testis, *gpt* delta transgenic mouse, 6-thioguanine selection

Introduction

Diesel exhaust (DE) emission is a major source of air pollutant in urban areas, and has been implicated in causing allergic respiratory disease and lung cancer (1,2). Diesel exhaust particles (DEP) have been known to contain potent carcinogens and mutagens, such as polyaromatic hydrocarbons (PAH; e.g., benzo[*a*]pyrene (B[*a*]P)) and nitrated PAH (e.g., 1,6-dinitropyrene (1,6-DNP)), of which mutagenicity has been evaluated *in vitro* using a *Salmonella typhimurium* TA98 assay (3,4). Exposure to DEP through inhalation or intratracheal instillation have been shown to cause oxidative DNA damage (5,6) and DNA adduct formation (7,8) in rat and mouse lungs, and long periods of inhalation of DE resulted in respiratory tract tumors in rats (9-12). These observations suggest that mutagens in DE induce mutations in the lung, a primary target organ of inhalation, and are responsible for inducing lung cancer. Furthermore, we have previously demonstrated that typical mutagens such as B[*a*]P (13) and 1,6-DNP (14), as well as inhalation of DE (15,16), caused mutations in the lungs using transgenic rodents for analyzing *in vivo* mutagenesis (Big Blue® rat and *gpt* delta mouse). Metabolites of PAH contained in suspended particulate matter in ambient air have been detected in human urine (17), suggesting that mutagenic PAH in DE are absorbed in the lungs and transported to extrapulmonary organs, such as the testis and liver, where they could exert possible genotoxicity. Watanabe *et al.* showed that the number of daily sperm and Sertoli cells in fetuses and male rats was decreased by DE exposure (18,19). However, the mutagenic effect of DE on the extrapulmonary organs has remained unclear.

We intended to evaluate the *in vivo* mutagenicity of DE in testis and liver to obtain fundamental data for assessing the health risks of air pollution. In order to evaluate *in vivo* mutagenicity, we used the *gpt* delta transgenic mice carrying the lambda phage EG10 as a transgene for detecting mutations on genomic DNA (20,21). When the rescued phage is infected into *E. coli* expressing Cre recombinase, the phage DNA is converted into plasmids harboring the chloramphenicol (Cm)-resistance gene and guanine phosphoribosyltransferase (*gpt*) gene. The *gpt* mutants can be positively detected as colonies arising on plates containing Cm and 6-thioguanine (6-TG). Our study revealed an elevated mutant frequency and alterations in the mutation spectrum in the testis of DE-inhaled *gpt* delta transgenic mice in which

[3]Correspondence to: Yasunobu Aoki, Research Center for Environmental Risk, National Institute for Environmental Studies, 16-2 Onogawa, Tsukuba, Ibaraki 305-8506, Japan. Tel: +81-29-850-2390, Fax: +81-29-850-2588, E-mail: ybaoki@nies.go.jp

the mutant frequency in the lung has already been reported to increase (16).

In this study, we show that inhalation of 3 mg m^{-3} DE (as suspended particulate matter (SPM)) for 24 weeks resulted in a 2.0-fold increase in mutant frequency in the testis of *gpt* delta mice compared to the controls, but the inhalation for 12 weeks did not elevate the mutant frequency in the testis. The mutant frequency in the liver was not increased by inhalation of DE under conditions where the mutant frequency in the testis and lungs were significantly increased. The predominant mutation spectrum in the testis in response to DE inhalation included G:C→T:A transversions, 1-base deletions and G:C→A:T transitions, while the major mutations in the lungs were G:C→A:T transitions (16). These data suggest that DE inhalation exerts genotoxicity on testis systemically.

Materials and Methods

Treatment of mice: *gpt* delta Mice carry ca. 80 copies of lambda EG10 DNA on each chromosome 17 in a C57BL/6J background (22). Exposure to DE (12 h d^{-1}, 7 d $week^{-1}$) was performed in chambers equipped by the National Institute for Environmental Studies (16,23) under the same conditions as those in our previous report on *in vivo* mutations in the lung (16). Three to five 7-week-old mice were exposed to 3 mg m^{-3} DE (as SPM) for 12 or 24 weeks. Seven mice were maintained in filtered clean air (control group). The animals were sacrificed 3 days after the last exposure and their testis and liver were removed, frozen in liquid nitrogen and stored at −80°C for this study.

***Gpt* mutation assay:** The *gpt* assay was performed as described previously (20). Genomic DNA was extracted from the testis and liver tissue using the RecoverEase DNA Isolation Kit (Stratagene Co., La Jolla, CA) and Lambda EG10 phages were rescued using the Transpack® Packaging Extract (Stratagene). *E. coli* YG6020 was infected with the phage, spread on M9 salt plates containing Cm and 6-TG (19), and then incubated for 72 h at 37°C for selection of the colonies harboring a plasmid carrying the chloramphenicol acetyltransferase (CAT) gene and a mutated *gpt* gene. Isolates from the 6-TG-resistant phenotype were cultured in LB broth containing 25 $\mu g/mL^{-1}$ Cm at 37°C overnight, harvested by centrifugation (7,000 rpm, 10 min) and stored at −80°C.

PCR and DNA sequencing of the 6-TG-resistant mutants: A 739 bp DNA fragment containing the *gpt* gene was amplified by PCR and sequenced as described previously (13,20). Sequencing was performed using the Big Dye Terminator v3.1 Cycle Sequencing Kit (Applied Biosystems, Foster City, CA) on an Applied Biosystems model 3730xl DNA analyzer.

Statistical analysis: All of the data are expressed as the mean ± SD. The statistical significance of the DE treatment was analyzed using the Student's *t*-test. $p<0.05$ was considered to be statistically significant. Mutational spectra were compared using the Adams-Skopek test (24,25).

Results

***Gpt* mutations in the testis, lung and liver of DE inhaled *gpt* delta mice:** In order to estimate the mutagenicity of DE, *gpt* delta mice inhaled DE (3 mg m^{-3} as SPM) for 12 or 24 weeks and mutations in the testis and liver were analyzed (Table 1). While the mutant frequencies in the testis of the control mice for 12 and 24 weeks inhalation were $0.57 \pm 0.04 \times 10^{-5}$ and $0.58 \pm 0.07 \times 10^{-5}$, respectively, inhalation of DE for 12 and 24 weeks resulted in 1.1 and 2.0-fold increases in mutant frequency ($0.61 \pm 0.08 \times 10^{-5}$ and $1.17 \pm 0.45 \times 10^{-5}$, respectively) compared with the controls (Table 1). Significant increases in the mutant frequency in the testis were observed in the group that inhaled DE for 24 weeks compared with the control group and the group that inhaled DE for 12 weeks. Our previous report demonstrated that inhalation of 3 mg m^{-3} DE for 24 weeks resulted in a 2.6-fold increase in the mutant frequency in the lung (Table 1) (16); however, the mutant frequency in the liver ($0.67 \pm 0.23 \times 10^{-5}$) was not elevated even after inhalation for 24 weeks compared with the control ($0.56 \pm 0.14 \times 10^{-5}$).

Alterations in the mutation spectrum in testis are induced by DE inhalation: In order to determine the mutation spectrum induced by DE inhalation, 170 6-TG-resistant mutants in a total were sequenced. As shown in Table 2, mutations of the *gpt* gene were detected in 149 mutants obtained from the testis of DE-inhaled and control mice (Table 1). The mutation type analysis indicated that the percentages of G:C→T:A transversions and 1-base deletions were increased in DE-inhaled mice (DE all) comparing to control mice (Control all). To characterize DE-induced mutagenesis precisely, the frequency of each mutation was calculated from data in Table 2 (Fig. 1). In the groups that inhaled DE for 24 weeks, the mutant frequency of G:C→T:A transversions, 1-base deletions and G:C→A:T transitions was 3.8×10^{-6}, 2.9×10^{-6} and 2.4×10^{-6}, whereas that of the control mice was, 1.0×10^{-6}, 0.6×10^{-6} and 1.9×10^{-6}, respectively. DE inhalation for 24 weeks caused a significant difference in the types of mutation in the control and DE inhalation groups ($p=0.04$, Adams-Skopek test).

The spectrum of *gpt* mutations in the testis that were induced by DE inhalation for 12 weeks and 24 weeks (Table 3) indicated a prevalence of G:C→T:A transversions with three mutation sites (nucleotide nos. 402, 406 and 409) being identified as hotspots in three or more mice, as well as G:C→A:T transition hotspots on

Table 1. Summary of mutant frequencies in the testis, lung and liver of *gpt* delta mice after inhalation of DE

Organ	DE concentration (mg m^{-3})	Exposure time (weeks)	ID of animals	Number of colonies		Mutant frequency ($\times 10^{-5}$)	Average mutant frequency ± SD ($\times 10^{-5}$)
				Mutant	Total		
Testis	0	12	1	7	1,265,600	0.55	
			2	9	1,428,800	0.63	
			3	10	1,792,000	0.56	
			4	10	1,820,800	0.55	
			Total	36	6,307,200		0.57 ± 0.04
	3	12	1	12	1,996,800	0.60	
			2	12	1,984,800	0.61	
			3	14	1,881,600	0.74	
			4	14	2,318,400	0.60	
			5	7	1,374,400	0.51	
			Total	59	9,556,000		0.61 ± 0.08
	0	24	1	9	1,676,800	0.54	
			2	5	756,800	0.66	
			3	7	1,291,200	0.54	
			Total	21	3,724,800		0.58 ± 0.07
	3	24	1	9	1,409,600	0.64	
			2	29	1,910,400	1.52	
			3	16	1,176,000	1.36	
			Total	54	4,496,000		1.17 ± 0.45*
Lung†	0	24	1	13	1,551,000	0.84	
			2	8	1,074,000	0.74	
			3	8	903,000	0.89	
			Total	29	3,528,000		0.82 ± 0.07
	3	24	1	10	462,500	2.16	
			2	11	546,000	2.01	
			3	16	745,600	2.15	
			Total	37	1,754,100		2.11 ± 0.08**
Liver	0	24	1	4	952,000	0.42	
			2	8	1,148,800	0.70	
			3	4	724,800	0.55	
			Total	16	2,825,600		0.56 ± 0.14
	3	24	1	2	275,200	0.73	
			2	2	483,200	0.41	
			3	8	937,600	0.85	
			Total	12	1,696,000		0.67 ± 0.23

Significant differences were detected between the control and DE-treated group (*: $p<0.05$, **: $p<0.001$).
†: data from our previous study (16).

another three sites (nucleotide nos. 64, 110 and 115). The predominant frameshift mutations induced by DE were single-base pair deletions in run sequences (22/29 = 76%); in this case the hotspot was located at nucleotide nos. 416–418. Therefore, the mutations on nucleotide nos. 402, 406, 409 and 416–418 seem to be characteristic of DE inhalation in testis, but were not hotspots in the lungs of DE-inhaled mice, while nucleotide no. 402 was a hotspot of G:C→A:T transitions in the lung.

Discussion

In this study we demonstrate that, as a result of inhalation of 3 mg m^{-3} DE, the mutant frequency in the testis of *gpt* delta mice increased with the duration of treatment (Table 1), but the mutant frequency in the liver was not elevated, indicating that DE inhalation exerts genotoxicity systemically on testis as well as on respiratory organs. This article is the first report on an increase in the mutant frequency in testis in response to DE inhalation (Table 1). Indeed, DE inhalation has also been

Table 2. Classification of *gpt* mutations from the testis of control and DE-inhaled mice

Type of mutation in the *gpt* gene	Control (weeks)			DE (weeks)		
	12	24	all	12	24	all
	%			%		
Base substitution						
Transition						
G:C→A:T	42	31	39	24	24	24
A:T→G:C	6	6	6	2	4	3
Transversion						
G:C→T:A	12	38	20	24	37	30
G:C→C:G	12	6	10	17	0	9
A:T→T:A	3	0	2	2	2	2
A:T→C:G	0	0	0	0	2	1
Deletion						
−1	12	13	12	30	28	29
>2	6	6	6	0	2	1
Insertion	6	0	4	2	0	1
Other	0	0	0	0	0	0
Total	100	100	100	100	100	100
Total number of mutants*	33	16	49	54	46	100

*: 149 of 170 6-TG-resitant mutants have mutation in the *gpt* gene.

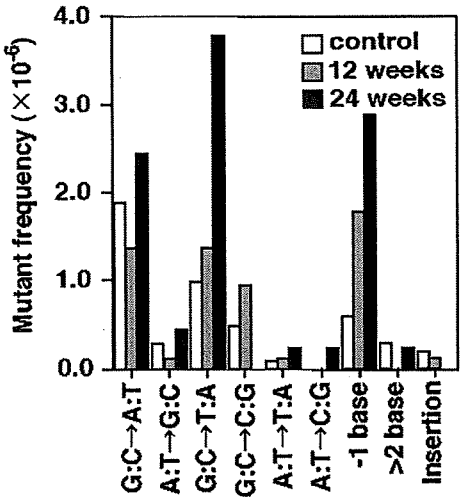


Fig. 1. Comparison of the 6-TG-resistant mutation spectra in control and DE inhaled *gpt* delta mice. The mutant frequencies of control mice and those exposed to DE for 12 weeks and 24 weeks were calculated by dividing the number of each type of *gpt* mutations in the Control all, DE 12 weeks and DE 24 weeks, respectively, by the corresponding total number of colonies (shown in Table 1).

shown to cause a decrease in the number of daily sperm and Sertoli cells in fetuses and male rats (18,19). Daily sperm production in the testis decreased dose-dependently in response to DE exposure for 6 months; a 53% reduction in sperm production was observed in rats exposed to DE (26) at the same concentration (3 mg m^{-3}) used in this study. These observations indicate that DE inhalation induces an increase in mutant frequency in the testis under the same conditions in which the reproduction of sperm was suppressed.

A significant increase in mutant frequency was observed in the testis after DE inhalation for 24 weeks but not for 12 weeks, while the mutant frequency in the lungs was elevated after inhalation for 24 weeks as well as 12 weeks (16). Delayed mutagenesis in germ cells has been observed in *lacZ* transgenic mice after 35 days treatment with ethyl nitrosourea (ENU) (27). Mutagens contained in DE were absorbed in the lung, systemically transported to the testis and possibly caused DNA adduct formation in spermatogonial stem cells and spermatogonia. These DNA adducts may be fixed as delayed mutations in germ cells through errors in DNA replication in continuous cell division during germ-cell development from spermatogenic cells to sperm. On the other hand, DNA adducts may be formed in the liver, but might not be fixed as mutations because of the low rate of cell division and/or high degree of DNA repair. However, Masumura *et al.* (28) showed that a heterocyclic amine, PhIP, was metabolically activated and induced point mutations in the liver but not the testis of *gpt* delta mice, suggesting that any factors governing the distribution and metabolism of mutagens in the body may determine the tissue specificity of mutagenesis.

The predominant mutation spectrum in the testis in response to DE included G:C→T:A transversions, 1-base deletions and G:C→A:T transitions (Table 2 and Fig. 1) as well as mutation hotspots on nucleotide nos. 402, 406 and 409, nos. 416–418 and nos. 64, 110 and 115, respectively (Table 3), while mutations in the lung were predominantly only G:C→A:T transitions (16). Mutation hotspots on nucleotide no. 406 and nos. 416–418 were identified in the testis of mice that inhaled DE for 12 weeks, in which the mutant frequency did not significantly increase, suggesting that DE acts as mutagenic agent even after inhalation for 12 weeks. G:C→T:A transversions have been known to be induced in *gpt* delta mice by B[*a*]P treatment (13) and 8-hydroxy-deoxyguanine (8-OHdG) generated by reactive oxygen species (ROS) (29). We have shown that the G:C→T:A transversion was a predominant mutation in Nrf2 deficient mice (30), in which the levels of the phase II detoxification enzymes and ROS-scavenging enzymes were suppressed (31,32) and DNA adduct formation was accelerated in the lung (33). These observations suggest some contribution of ROS to inducing mutation hotspots of G:C→T:A transversions (nucleotide nos. 402, 406 and 409) in the testis of mice subjected to DE inhalation. Nucleotide nos. 64, 110 and 115 were mutation hotspots of G:C→A:T transitions in the testis of DE-inhaled mice as well as in 1,6-dinitropyrene (DNP)-instilled lungs of *gpt* delta mice (14), and were also mutation hotspots in non-treated mice (34). The compo-

Table 3. DNA sequence analysis of *gpt* mutations obtained from the testis of DE-treated and control mice

Type of mutation	Mutation			Amino acid change	Number			
					Control		DE	
	Nucleotide number	Sequence Change			12 weeks	24 weeks	12 weeks	24 weeks
Base substitution								
Transition								
G:C→A:T	3	atG → atA		Met → Ile	1			
	64	Cga → Tga	CpG	Arg → Stop	1		4†	
	82	Caa → Taa		Gln → Stop	1			
	86	tGg → tAg		Trp → Stop	1			
	107	aGc → aAc		Ser → Asn		1		
	110	cGt → cAt	CpG	Arg → His	2*		2	2*
	113	gGc → gAc		Gly → Asp		1	1	
	115	Ggt → Agt	CpG	Gly → Ser	1		3*	3*
	116	gGt → gAt		Gly → Asp	2*	1	1	1
	145	Gaa → Aaa		Glu → Lys			1	
	176	tGt → tAt		Cys → Tyr	1			
	202	Cag → Tag		Gln → Stop				1
	401	tGg → tAg		Trp → Stop	1			
	402	tgG → tgA		Trp → Stop			1	1
	418	Gat → Aat		Asp → Asn	3†	1		3*
	451	Ggt → Agt	CpG	Gly → Ser		1		
A:T→G:C	56	cTc → cCc		Leu → Pro	1			1
	410	cAg → cGg		Gln → Arg				1
	415	Tgg → Cgg		Trp → Arg	1			
	419	gAt → gGt		Asp → Gly		1	1	
Transversion								
G:C→T:A	7	Gaa → Taa	CpG	Glu → Stop				1
	59	gCa → gAa		Ala → Glu				1
	110	cGt → cTt	CpG	Arg → Leu				1
	127	Ggt → Tgt		Gly → Cys				1
	140	gCg → gAg	CpG	Ala → Glu		2	1	1
	145	Gaa → Taa		Glu → Stop				1
	189	taC → taA	CpG	Tyr → Stop		1	1	
	208	Gag → Tag	CpG	Glu → Stop				1
	287	aCt → aAt		Thr → Asn			1	
	304	Gaa → Taa		Glu → Stop	1		1	1
	401	tGg → tTg		Trp → Leu	1			1
	402	tgG → tgT		Trp → Cys	1		2*	1
	406	Gaa → Taa		Glu → Stop			4†	4*
	409	Cag → Aag		Gln → Lys			1	2*
	413	cCg → cAg	CpG	Pro → Gln	1	2*		1
	418	Gat → Tat		Asp → Tyr		1	2*	
G:C→C:G	3	atG → atC		Met → Ile			1	
	6	agC → agG	CpG	Ser → Arg	1			
	109	Cgt → Ggt	CpG	Arg → Gly			1	
	143	cGt → cCt	CpG	Arg → Pro	1			
	145	Gaa → Caa		Glu → Gln			1	
	262	Gat → Cat		Asp → His	1			
	289	Gcg → Ccg		Ala → Pro			1	
	340	Gca → Cca	CpG	Ala → Pro			2*	
	401	tGg → tCg		Trp → Ser			1	
	402	tgG → tgC		Trp → Cys		1		
	413	cCg → cGg	CpG	Pro → Arg			2*	
	418	Gat → Cat		Asp → His	1			
A:T→T:A	35	tTg → tAg		Leu → Stop				1
	146	gAa → gTa		Glu → Val			1	
	179	aTt → aAt		Ile → Asn	1			
A:T→C:G	106	Agc → Cgc		Ser → Arg				1

Table 3. cont.

Type of mutation	Nucleotide	Sequence Change	Number			
			Control		DE	
			12 weeks	24 weeks	12 weeks	24 weeks
Deletion	8-12	gAAAAAt → gAAAAt	1		2	1
−1 base	126-128	cGGGt → cGGt			1	
	133-134	gTTa → gTa			1	
	155-156	aTTc → aTc	1			
	179-181	aTTTc → aTTc				2
	230	gCa → ga				1
	237	gCg → gg	1			1
	244	cGa → ca			1	
	249	gCt → gt	1			
	277	tAc → tc			1	
	387-389	tCCCg → tCCg			1	
	416-418	tGGGa → tGGa		1	7†	5†
	420	aTa → aa				1
	426	gCg → gg			1	
	431	gTa → ga		1		
	442-443	gCCa → gCa				1
	451-452	cGGt → cGt				1
	454	tCg → tg			1	
>2	26-34	tGGGACATGTTg → tg		1		
	170-171	aCCg → ag	1*			
	238-249	cGATGGCGAAGGCt → ct	1			1
Insertion	75	ct → cAt	1			
	107	ag → aTg	1			
	214-216	taaag → tAaaag			1	
Total			33	16	54	46

* and †: Mutations found in 2 and 3 different mice, respectively.

nents in DE, such as 1,6-DNP and related compounds, may also contribute to enhance spontaneous mutations *via* the generation of ROS in the lung and also in the testis in response to DE inhalation.

Potent mutagens such as B[*a*]P and 1,6-DNP in DE are suspected to cause tumors in the lung, but their effect on the germline remains to be investigated. Previously, B[*a*]P was shown to induce a dominant-lethal mutation in the germ cells of male mice (35). We show that inhalation of DE, a major air pollutant in urban air, induces mutations in the testis, suggesting that mutagenic PAH and other mutagenic compounds in DE cause germline mutations. Previously, a germline mutation has been reported to occur in herring gulls living in an urban area (36). Recently, heritable DNA mutations in micro-satellite DNA were identified in mice that inhaled polluted ambient air in an industrial area (37,38); exposure to polluted ambient air for 10 weeks, followed by 6 weeks in the laboratory, was required for a significant increase in the sperm mutant frequency in these mice (38). This observation (38) corresponds to the delayed induction of point mutations in the testis in our study. Mutagenic compounds in ambient air may contribute to the induction of germline mutations. However, further studies are required to confirm that DE and other air pollutants cause mutations in germline cells, which are good markers for assessing the health risk of air pollution.

Acknowledgements: We thank Drs. Hiroaki Shiraishi and Michi Matsumoto (National Institute for Environmental Studies) for their support and advice. This research was supported in part by a Grant-in-Aid from the Japan Society for the Promotion of Sciences (#14207100).

References

1 International Programme on Chemical Safety. Diesel fuel and exhaust emission. Environmental Health Criteria. Vol 171, Geniva: World Health Organization; 1996.
2 United States Environmental Protection Agency. Diesel engine exhaust. Integrated Risk Information System. (http://www.epa.gov/ncea/iris/subst/0642.htm). 2008.
3 Østby L, Engen S, Melbye A, Eide I. Mutagenicity testing of organic extracts of diesel exhaust particles after fractionation and recombination. Arch Toxicol. 1997; 71: 314-9.
4 Rivedal E, Myhre O, Sanner T, Eide I. Supplemental role

of the Ames mutation assay and gap junction intercellular communication in studies of possible carcinogenic compounds from diesel exhaust particles. Arch Toxicol. 2003; 77: 533–42.
5 Nagashima M, Kasai H, Yokota J, Nagamachi Y, Ichinose T, Sagai M. Formation of an oxidative DNA damage, 8-hydroxydeoxyguanosine, in mouse lung DNA after intratracheal instillation of diesel exhaust particles and effects of high dietary fat and beta-carotene on this process. Carcinogenesis. 1995; 16: 1441–5.
6 Iwai K, Adachi S, Takahashi M, Möller L, Udagawa T, Mizuno S, Sugawara I. Early oxidative DNA damages and late development of lung cancer in diesel exhaust-exposed rats. Environ Res. 2000; 84: 255–64.
7 Gallagher J, Heinrich U, George M, Hendee L, Phillips DH, Lewtas J. Formation of DNA adducts in rat lung following chronic inhalation of diesel emissions, carbon black and titanium dioxide particles. Carcinogenesis. 1994; 15: 1291–9.
8 Sato H, Suzuki KT, Sone H, Yamano Y, Kagawa J, Aoki Y. DNA-adduct formation in lungs, nasal mucosa, and livers of rats exposed to urban roadside air in Kawasaki City, Japan. Environ Res. 2003; 93: 36–44.
9 Mauderly JL, Jones RK, Griffith WC, Henderson RF, McClellan RO. Diesel exhaust is a pulmonary carcinogen in rats exposed chronically by inhalation. Fundam Appl Toxicol. 1987; 9: 208–21.
10 Nikula KJ, Snipes MB, Barr EB, Griffith WC, Henderson RF, Mauderly JL. Comparative pulmonary toxicities and carcinogenicities of chronically inhaled diesel exhaust and carbon black in F344 rats. Fundam Appl Toxicol. 1995; 25: 80–94.
11 Iwai K, Higuchi K, Udagawa T, Ohtomo K, Kawabata Y. Lung tumor induced by long-term inhalation or intratracheal instillation of diesel exhaust particles. Exp Toxicol Pathol. 1997; 49: 393–401.
12 Valberg PA, Crouch EA. Meta-analysis of rat lung tumors from lifetime inhalation of diesel exhaust. Environ Health Perspect. 1999; 107: 693–9.
13 Hashimoto AH, Amanuma K, Hiyoshi K, Takano H, Masumura K, Nohmi T, Aoki Y. *In vivo* mutagenesis induced by benzo[*a*]pyrene instilled into the lung of *gpt* delta transgenic mice. Environ Mol Mutagen. 2005; 45: 365–73.
14 Hashimoto AH, Amanuma K, Hiyoshi K, Takano H, Masumura K, Nohmi T, Aoki Y. *In vivo* mutagenesis in the lungs of *gpt* delta transgenic mice treated intratracheally with 1,6-dinitropyrene. Environ Mol Mutagen. 2006; 47: 277–83.
15 Sato H, Sone H, Sagai M, Suzuki KT, Aoki Y. Increase in mutation frequency in lung of Big Blue rat by exposure to diesel exhaust. Carcinogenesis. 2000; 21: 653–61.
16 Hashimoto AH, Amanuma K, Hiyoshi K, Sugawara Y, Goto S, Yanagisawa R, Takano H, Masumura K, Nohmi T, Aoki Y. Mutations in the lungs of *gpt* delta transgenic mice following inhalation of diesel exhaust. Environ Mol Mutagen. 2007; 48: 682–93.
17 Sørensen M, Autrup H, Hertel O, Wallin H, Knudsen LE, Loft S. Personal exposure to PM2.5 and biomarker of DNA damage. Cancer Epidemiol Biomarkers Prev. 2003; 12: 191–6.
18 Watanabe N, Oonuki Y. Inhalation of diesel engine exhaust affects spermatogenesis in growing male rats. Environ Health Perspect. 1999; 107: 539–44.
19 Watanabe N. Decreased number of sperms and Sertoli cells in mature rats exposed to diesel exhaust as fetuses. Toxicol Lett. 2005; 155: 51–8.
20 Nohmi T, Suzuki T, Masumura K. Recent advances in the protocols of transgenic mouse mutation assays. Mutat Res. 2000; 455: 191–215.
21 Thybaud V, Dean S, Nohmi T, de Boer J, Douglas GR, Glickman BW, Gorelick NJ, Heddle JA, Heflich RH, Lambert I, Martus H, Mirsalis JC, Suzuki T, Yajima N. *In vivo* transgenic mutation assays. Mutat Res. 2003; 540: 141–51.
22 Nohmi T, Katoh M, Suzuki H, Matsui M, Yamada M, Watanabe M, Suzuki M, Horiya N, Ueda O, Shibuya T, Ikeda H, Sofuni T. A new transgenic mouse mutagenesis test system using Spi- and 6-thioguanine selections. Environ Mol Mutagen. 1996; 28: 465–70.
23 Takano H, Ichinose T, Miyabara Y, Shibuya T, Lim H, Yoshikawa T, Sagai M. Inhalation of diesel exhaust enhances allergen-related eosinophil recruitment and airway hyperresponsiveness in mice. Toxicol Appl Pharmacol. 1998; 150: 328–37.
24 Adams WT, Skopek TR. Statistical test for the comparison of samples from mutational spectra. J Mol Biol. 1987; 194: 391–6.
25 Cariello NF, Piegorsch WW, Adams WT, Skopek TR. Computer program for the analysis of mutational spectra: application to *p53* mutations. Carcinogenesis. 1994; 15: 2281–5.
26 Yoshida S, Sagai M, Oshio S, Umeda T, Ihara T, Sugamata M, Sugawara I, Takeda K. Exposure to diesel exhaust affects the male reproductive system of mice. Int J Androl. 1999; 22: 307–15.
27 Douglas GR, Jiao J, Gingerich JD, Gossen JA, Soper LM. Temporal and molecular characteristics of mutations induced by ethylnitrosourea in germ cells isolated from seminiferous tubules and in spermatozoa of *lacZ* transgenic mice. Proc Natl Acad Sci USA. 1995; 92: 7485–9.
28 Masumura K, Matsui K, Yamada M, Horiguchi M, Ishida K, Watanabe M, Ueda O, Suzuki H, Kanke Y, Tindall KR, Wakabayashi K, Sofuni T, Nohmi T. Mutagenecity of 2-amino-1-methyl-6-phenylomidazo[4,5-b]pyridine (PhIP) in the new *gpt* delta transgenic mouse. Cancer Lett. 1999; 143: 241–4.
29 Arai T, Kelly VP, Komoro K, Minowa O, Noda T, Nishimura, S. Cell proliferation in liver of *mmh/ogg1*-deficient mice enhances mutation frequency because of the presence of 8-hydroxyguanine in DNA. Cancer Res. 2003; 63: 4287–92.
30 Aoki Y, Hashimoto AH, Amanuma K, Matsumoto M, Hiyoshi K, Takano H, Masumura K, Itoh K, Nohmi T, Yamamoto M. Enhanced spontaneous and benzo[*a*]pyrene-induced mutations in the lung of Nrf2-deficient *gpt* delta mice. Cancer Res. 2007; 67: 5643–8.

31 Itoh K, Chiba T, Takahashi S, Ishii T, Igarashi K, Katoh Y, Oyake T, Hayashi N, Satoh K, Hatayama I, Yamamoto M, Nabeshima Y. An Nrf2/small Maf heterodimer mediates the induction of phase II detoxifying enzyme genes through antioxidant response elements. Biochem Biophys Res Commun. 1997; 236: 313–22.

32 Motohashi H, Yamamoto M. Nrf2-Keap1 defines a physiologically important stress response mechanism. Trends Mol Med. 2004; 10: 549–57.

33 Aoki Y, Sato H, Nishimura N. Takahashi S, Itoh K, Yamamoto M. Accelerated DNA adduct formation in the lung of the Nrf2 knockout mouse exposed to diesel exhaust. Toxicol Appl Pharmacol. 2001; 173: 154–60.

34 Masumura K, Matsui K, Yamada M, Horiguchi M, Ishida K, Watanabe M, Wakabayashi K, Nohmi T. Characterization of mutations induced by 2-amino-1-methyl-6-phenylimidazo[4,5-*b*]pyridine in the colon of *gpt* delta transgenic mouse: novel G:C deletions beside runs of identical bases. Carcinogenesis. 2000; 21: 2049–56.

35 Generoso WM, Cain KT, Hellwig CS, Cacheiro NLA. Lack of association between induction of dominant-lethal mutations and induction of heritable translocations with benzo[*a*]pyrene in postmeiotic germ cells of male mice. Mutat Res. 1981; 94: 155–63.

36 Yauk CL, Fox GA, McCarry BE, Quinn JS. Induced minisatellite germline mutations in herring gulls *(Larus argentatus)* living near steel mills. Mutat Res. 2000; 452: 211–8.

37 Somers CM, Yauk CL, White PA, Parfett CL, Quinn JS. Air pollution induces heritable DNA mutations. Proc Natl Acad Sci USA. 2002; 99: 15904–7.

38 Yauk C, Polyzos A, Rowan-Carroll A, Somers CM, Godschalk RW, Van Schooten FJ, Berndt ML, Pogribny IP, Koturbash I, Williams A, Douglas GR, Kovachuk O. Germ-line mutations, DNA damage, and global hypermethylation in mice exposed to particulate air pollution in urban/industrial location. Proc Natl Acad Sci USA. 2008; 105: 605–10.

Nova Science Publishers, Inc.
400 Oser Avenue, Suite 1600, Hauppauge, N. Y. 11788-3619, USA
Phone (631) 231-7269 Fax (631) 231-8175
E-mail: main@novapublishers.com
www.novapublishers.com

Potency of Air Pollutants at DNA Adduct Formation and Assessment by *In Vivo* Mutagenesis

Yasunobu Aoki
Akiko H. Hashimoto
Hiromi Sato
Michi Matsumoto

1: "DNA Adducts:
ormation,
'etection and
[utagenesis"
ditors:
. Alvarez and
. Cunha
SBN:
78-1-60741-433-9
)10